
ヴィレッジ・オブ・ザ・デッド VILLAGE・OF・THE・DEAD

水上和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィレッジ・オブ・ザ・デッド VILLAGE・OF・THE・
DEAD

【Nコード】

N9646M

【作者名】

水上和樹

【あらすじ】

1945年・広島・長崎の原子爆弾の他に、もう一つの新爆弾が投下されていた。その爆弾の成果を調査するために派遣された米軍の一個小隊。そこで彼らは死者の集落へと足を踏み入れることになる…

プロローグ（前書き）

筆者にゾンビの魅力を教えて下さったジョージ・A・ロメロ氏に近付けねばと思います。

ブローグ

日本、1945年 8月某日。

一機の戦闘機が空を駆けていた。

ニッケネームは超空の要塞（スーパードレス）、機体名はB

- 29 戦略爆撃機。

東京大空襲、広島・長崎への原子爆弾の投下：多くの一般市民の命を奪ったという意味では無差別大量破壊兵器と呼ばれても相違ない。

広島にはエノラゲイ号がウラン型の原子爆弾リトルボーイを落とし、長崎にはボックスカー号がプルトニウム型の原子爆弾ファットマンを落とすが、この中国地方の山間を飛行するジョージアン号も、新型爆弾ドリユーロメロを搭載していた。

もはや戦争の大勢は決し、大日本帝国が数日後にはポツダム宣言を受諾するのも確実と見られていた。

しかし戦争が終結すれば新兵器の実地試験が行えなくなるという、司令官の鶴の一声で投下が決定した。

非人道的だが、太平洋戦争末期の米軍は日本人の命など何とも思っていない。作戦だと言われれば無感情で実行する彼らは紛れもない軍人だった。

この新型爆弾の性質もあり、投下地点はできるだけ人口の少ない山間の集落と定められた。

この性質は、環境汚染を目的に開発され、実用化されれば、草木を枯らし、農作物を毒物に変え、河川も汚染するという生きていく上での基盤を破壊するための兵器である。

しかし人体への影響は不明となっており、まず投下し、一月の間を取り、研究者を含む小隊が実地調査をして、爆弾の成果をまとめる

という計画が立てられた。

「目標地点に到着します」

パイロットが無機質に言う。

高度3000m、この高度なら精確な位置に投下できるだろう。

「5...4...3...2...1...投下」

数トンもの重量をもつ爆弾が投下され、機体が軽くなる。

「回避」

高度8000mを目指し上昇する。もう一機の偵察機が爆弾の監視をする。

豆粒ほどの大きさに見えるそれは、弾けると周囲を煙で覆った。

キノコ雲にはならず、その白い煙はむしろ逆行して下へ下へと向かう。

その不可思議な現象に、米兵も不吉な予感を感じずにはいられなかった。

その煙は霧のように緩やかに広がり、静かにその地域を侵略していく。

そして半径1キロを覆い、一時間後には何事も無かったかのように消失した。

進入 前編

日本、1945年 10月10日。

終戦後、10月2日によやく連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が東京に設立され、日本国内は急速に変革していく。

そんなゴタゴタした時代の中、とある一個小隊がトラックを駆り、中国地方の山間部を走っていた。

トラック内には10名の兵士と、兵装をした老人と若者：計12名がいる。

彼らは米軍だ。

中国地方と四国地方はイギリス連邦占領軍（BCOF）の管轄であり、他の県はアメリカ占領軍（USOF）が管轄している。

しかし彼らはそのどちらにも所属しない独立小隊として、アメリカ本国から密命を受けていた。

そう、新型爆弾爆発後の実地調査である。

兵装をした老人はライミという科学者で、新型爆弾を作製したチームの一人。

若者はサムといいライミの助手をしている。

彼ら二人はどのような影響があったのかを調べ、生態系のサンプルを持ち帰るのが目的である。

10名の兵士は研究者を手伝い、また反米感情のある日本人に襲われないよう護衛する命令を受けていた。

舗装されていないトラック道を右に左にと揺れながらトラックが走る。

「まだかね？」

ライミが沈黙を破った。

呉港から上陸し、休まずにトラックを走らせ続けて六時間。いい加減老いた体が悲鳴をあげた。

若いサムも先程から何度も座り直し、尻の痛みに耐えている。

「もうすぐです」

小隊長のダニーが地図を見て応えた。しかしライミは憤慨している。

「一時間前もそう言ったぞ！」

「俺らに言ってもどうにもなんねえよ、じいさん」

横からザックが声をかけた。

気まぐれで減らず口ばかりたく、しかし銃の腕はピカイチの兵士だ。

「その口のきき方はなんですか！」

ライミを尊敬しているサムが今度は憤慨した。

「お子様は黙ってな」

ザックは相手にしない。

「この辺りだ」

ダニーはちよつとした言い争いなど無かったかのように言った。

彼の見る地図は爆心地から半径1キロを円で囲んでいる。その縁にトラックは入ったようだ。

見たところ景色は相変わらず左右に山のトラック道。

「あと数分で爆心地に到着します」

ダニーがライミに言った。ライミはやれやれとトラックの幌に背を預けた。

進入 後編

運転手であるジャウマはこの日数十回目とあるあくびをして助手席にいるパコに話しかけた。

「おいまだかよー」

「今ようやく半径1キロの所に入ったよ」

「やつとか…もう疲れたぜ」

「あと数分の辛抱…」

パコが話し途中で黙った。

「どうした？」

ジャウマが前方を気にしながらパコを伺う。

「集落だ」

ジャウマも気付いた。山の斜面にちらほら民家が見えるのだ。その数は徐々に増し、爆心地付近が最も多かった。百世帯近くは住んでいたのだろう。しかし人影はない。

「おい」

「ああ」

二人は何も言わなかった。

人影がないその理由は、自国が試験目的に強引に投下した爆弾が原因なのだから。

戦争で行われた事で責任もないことだから彼らは全く罪悪感などない。

しかしこの場で死者を貶めるような軽々しい会話などはしないというモラルはあった。

「停止します」

爆心地付近でジャウマが車を停めた。

爆心地自体は少し集落に入ることになり、車では侵入できなかった。

「ここでキャンプをしよう」

車から降りて整列する9名の兵士にダニーが言った。

時刻は正午を回った所だ。予定では三日間ここで調査をすることになる。

トラックには銃火器、食料、無線機、サンプル回収用ボックスなど積まれており4人が寝るのがやっとだ。トラック付近に4人用テントを二基立て、残りはそこで寝る。

集落なので家はあるのだが、新型爆弾は化学兵器と同義。

すでにそれは霧散しているとはいえ、汚染されている場所で眠るのは危険だった。

「早速付近を調べたいのじゃが…」

ライミがダニーに言った。現地に到着して車から降りた途端に元気になったようだ。

「わかりました」

ダニーは数秒考えた。

「まずは昼食を取り、ジャウマとパコは二時間の仮眠後ラッセルとステイプと共にテントの設営等キャンプの準備、エロリーとジェフリーは人の有無を確認、残りは調査に参加する」

「イエス・サー！」

兵士は皆統率され、迅速に動き出した。

とはいえ、時は待ちに待った終戦後。

ダニーという上官は真面目だが、訓練キャンプの鬼教官のように怒るタイプではない。

張りつめた緊張感はなく、どこかリラックスした…つまり気の抜けた空気があった。

巡回班

昼食後、エロリーとジェフリーは民家を一軒ずつ巡回し始めた。しかし周囲には人一人いない。

「い、一体何の爆弾だったんだろうな？」

ジェフリーが口を開いた。彼は少し臆病な所がある。エロリーはぶっきらぼうに応える。

「知らねー。まあ化学兵器だったんだろうさ。人はおろか動物すら見かけねーし」

「し、死体も残らない？」

「知らねー。生物が溶けるとか…かもな」

「そ、それは…こ、怖いな」

「いや知らねーけどさ」

確におかしな現場だった。人はもちろん、家畜もいない、鳥の囀さえずりすら聞こえない。

まるでこの一帯だけが死に覆われているようだ。

「しかし参ったな…現地の女抱いてやろうと思っていたのに」

「お、おい、それはき、禁止されている…だろ」

「けっ！敗戦国の女を抱くぐらいなんだ。無理矢理犯したって泣き寝入りするか、訴えても合衆国ステイツが揉み消してくれるさ」

「そ、それは…」

普段は適当な発言しかしないエロリーも、女のこととなると饒舌に、アグレッシブそして攻撃的になる。

ガサッ！

突然民家裏の草むらから物音がした。

エロリーは手で、物音を立てないように、とジェフリーに指示をだした。

そつと建物の影から物音の正体を探る。

「女ウオだ！」

黒髪を長く伸ばした女性が、草むらを奥へ奥へと歩いている。

エロリーは小声でジェフリーに伝えた。

臆病な彼は眉をしかめた。

これから彼女に起こるであろう不幸をすでに同情しているのだ。

彼女はふらふらと歩いている。さ迷うように見えるが、行き先は決まっているように感じる。

エロリーは先行して物音を立てないようにひっそりと近付いていく。そろりそろりとまるで忍者のように。

そしてあと三步程度で彼女を押し倒せるという位置まで来たとき、突然彼女は駆け出した。

それまでの覚束ない足取りからは想像がつかないほどに、しっかりとした走りだった。

「待て！」
ウェイト

エロリーは声を上げた。彼女は後ろを向かず、一心不乱にただ前へ進む。

草むらや雑木など構わず、警戒しながら進む彼ら兵士よりも速く走り、あっという間に見失ってしまった。

「クソッ！」
ファック

エロリーは悔しがる。しかしジェフリーは少しホッとしていた。

「見たか？」

エロリーはジェフリーに向かって声を荒げた。

「な、な、な、何を？」

「あの黒髪ヤマトナデシコの女、きつといい女だぜ」

「そ、そうか？」

「そうに決まっているさ！決めたぞ、今からあの女を捜しだして一イチ発ハツ決めてやる」

「お、俺は…い、嫌だ」

「ふん、お前は巡回でもしてればいいさ。俺は行くからな」

「め、命令、違反…じゃないか」

「あん？生存者は捕まえて連れてこないとな。しかし抵抗されたら…なあ？」

「な、何だよ」

「こそこそするような女は俺の太いバスーカの一本ぶち込めば黙ってついてくるもんよ」

「……………」

「んじゃ、俺は行くぞ」

「くっ…っ、ついてくよ」

二人は奥へ行くほどに暗くなっていく雑木林を進んで行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9646m/>

ヴィレッジ・オブ・ザ・デッド VILLAGE・OF・THE・DEAD

2010年11月12日07時22分発行